

令和4年度 野生鳥獣との共存に向けた生息環境等整備調査（屋久島地域）  
報告書要約版（案）

(1) 生息密度調査（糞粒法）

【調査内容】

- ・ 下記 5 地点の調査結果からヤクシカの生息密度を推定し、地域間比較等を行った。さらに、過去にも調査されている地域に関しては、推定生息密度の増減と増加率を求めた。
- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

- ・ (増加) 愛子西、尾之間下、大川林道奥 (減少) 一湊林道、宮之浦林道
- ・ 捕獲を継続した大川林道奥で増加、休止した宮之浦林道で減少の傾向が見られ、隣接地域からのヤクシカの流入・流出や、捕獲を免れた警戒心の強い個体の繁殖の可能性がある。

(2) 植生の保護・再生手法の検討

【調査内容】

①植生保護柵の保守点検

- ・ 既存植生保護柵 31 箇所（植生保護柵 23 箇所・萌芽枝保護柵 8 箇所）の維持管理。

②マテバシイ萌芽枝の生育状況

- ・ 柵内外のマテバシイ母樹、萌芽枝、及びカシノナガキクイムシの穿入痕調査を実施。

③植生保護柵内外の植生調査

- ・ 柵内外それぞれ 2m×2mの小プロットを 4 地点設定し、低木層（1m以下）と草本層について植物社会学的調査を実施。

④植生被害ライン調査

- ・ 一湊林道（北）、愛子西（北東）、尾之間下（南）、大川林道奥（中央）、宮之浦林道（中央）

【結果】

- ①9月の台風14号の直撃によりカンカケ・川原（西部）で倒木が発生し、大規模な柵の破損が確認された。愛子岳（北東部）、中間・尾之間（南部）では軽微な補修で済んだ。
- ②川原地区のマテバシイ（柵内）は、台風襲来で根元から折れ、根株腐朽が進んでいたことが分かった。半山地区のマテバシイ（柵内）は以前から根株腐朽に罹患していたが、今回シロアリの食害が確認された。両地区ともカシノナガキクイムシの攻撃がこの3年間で不検出または減少したのは、根株腐朽等により繁殖に適さなくなった可能性がある。
- ③種数は全地域で柵内の方が柵外より多かった。実生本数もほとんどで柵内の方が柵外より多かったが、愛子 400m では逆転、カンカケ 400m では柵内外同数で、アリドオシ、バリバリノキ等の不嗜好植物が、柵外でシカに採食されずに増加したことが数値に表れた。中間 7 柵内は 10 年間で種数・実生本数とも減少した。柵内の実生の低木化、柵外のサクラツツジの亜高木化で照度不足が原因と考えられる。
- ④全ての調査箇所で見出された出現本数は減少し、一湊林道を除く他の 4 林道では種数も減少もした。

不嗜好植物の食害が目立ち、ヤクシカが採餌に困難な状況が続いていると考えられる。

### (3) 森林生態系の管理目標に関する現状把握・評価

#### 【管理目標】

- ・①屋久島の多雨環境を反映したシダ植物の林床被度の回復②屋久島世界自然遺産の顕著な普遍的価値である植生垂直分布を形成する植物種の多様性の回復③ヤクシカの嗜好性植物種の更新④絶滅のおそれのある固有植物種等の保全

#### 【現状評価】

- ①多くの地点で柵内外の被度が目標に至っていない種が多く見られた。
- ②2022年調査結果を追加した結果、4標高帯とも引き続き種数が増加し、全ての標高帯において調査開始当初の2002年度の種数を超え目標を達成していることが確認できた。2002年に確認され、2022年までに消失した植物種は15種であった。
- ③嗜好性の高い種はサンショウソウのみであったが、環境省RL(2020)掲載種が2種あった。一方、2022年の回復種は9種であった。中央部地域ではヤクシカの嗜好性植物種としてサンショウソウが2002年度と2007年度調査において、標高1200mと標高1400mで確認されたのみであり、いずれの標高帯においても消失した状況が続いている。このため、目標を達成できていない。
- ④確認地点数については、過年度の状況を維持しているが、確認地点ごとに確認種数を見ると減少地点もあり、これらの地点については注意する必要がある。個体数については、地生種で5地点、着生種で2地点において減少しており、これらの地点では目標に至っていない状況であった。

### (4) 高層湿原におけるヤクシカの生態調査

#### 【調査内容】

- ①自動撮影カメラによる分析
  - ・夏季から冬季にかけて自動撮影カメラ10台を20週間以上設置し、画像データを分析。
- ②糞塊調査
  - ・冠水状況と植生群落状況から区分し、花之江河33箇所、小花之江河22箇所を実施。

#### 【結果】

- ①毛繕いや、登山客の接近を許したり、水路内や雪の中の歩行するヤクシカが確認された。1日当たりの撮影頭数は、すべてのカメラで前半(夏季～秋季)の方が後半(秋季～冬季)より多かった。前後半を通して闘争の撮影がほとんどなく、単独で行動する個体が多く、延べ撮影頭数は雄で半減した。但し幼獣で増加したため、令和2年度の水準に戻った。昨年度撮影されなかったタヌキは前後半を通じて撮影され、コイタチは後半に撮影された。
- ②8月・11月とも花之江河の方が小花之江河よりも糞塊数が多かった。8月の調査で、花之江河はこれまでで最も少ない糞塊数を記録し、小花之江河では糞塊が確認されなかった。7月末に相次いで襲来した台風により、糞塊が流出したと考えられる。